

中島敦「ナポレオン」論——帝国の境界までの旅

BOVA ELIO

はじめに

中島敦「ナポレオン」は、「環礁——ミクロネシア巡島記抄——」（以下「環礁」と略称）の総題のもと作品集『南島譚』（今日の問題社 一九四二・一一）に収録された。

作品は日本統治下での南洋群島諸島が舞台になっており、作者のパラオ諸島滞在の経験より構想されたものである。中島敦は一九四一年七月上旬、太平洋戦争勃発直前に南洋群島に渡り、翌年三月中旬に帰国するまでの約八ヶ月間を南洋庁内務部地方課に編修書記¹⁾として勤めた。編修書記の仕事とは日本統治下の南洋群島の先住民児童を対象とした教科書『公学校本科国語読本』及び『公学校補習科国語読本』の編修・審査にあたることであった²⁾。編修書記の他に、南洋群島エリアの島々を移動し、現地の公学校の視察と授業の参観も中島の勤めの一部であった。「ナポレオン」はこうした経験を素材としている。

とはいえ、「ナポレオン」は作者の実体験をそのまま描いた作品ではなく、一九四一年に中島がコロール本島で知り合った土方久功の日記に収録された「南方離島記」、特にその中でナポレオンという少年に関わる記述にも着想を得て創作されたものである。

濱川勝彦³⁾は、〈南洋もの〉全般に着目した論考において初めて作品「ナポレオン」を取り上げ、土方日記との関連性を指摘した⁴⁾。しかしながら、濱川は土方日記原本を参考としておらず、土方「南方離島記」の一部が収録された『青蜥蜴の夢』（大塔書店刊 一九五六・六）を元としている。土方日記全体は近年になって公開された⁵⁾。清水久夫は土方の日記の公開のために大きく協力した研究者である。氏の論考⁶⁾では、中島「環礁」及び「南島譚」中の土方日記との主な類似・相違箇所が挙げられるが、中島のこれらの箇所の選択基準と、特に「ナポレオン」での「南方離島記」に似通った部分の捉え方に関しては分析を加える余地がある。なお、「南方離島記」と比べて「ナポレオン」のみにおける「私」とナポレオンとの旅の描かれ方は二篇の間の大きな相違点をなしている。本論では、S島、さらにT島とH環礁へと帝国の境まで進むこうした旅の描かれ方から「ナポレオン」独自の次の三つのモチーフを捉えていきたい。一つは故郷からの距離 distance、もう一つは自己と環境の問題的な関係性である。三つ目は、誘引・影響力のある、故に関わらざるを得ないものとして認識される環境若くは〈他者〉との隔たりを占める境 boundaries を絶間なく捉えなおしていかなばならぬという自己の表れ様である。これらのモチーフを明らかにする目的をもって、以下の課題に取り組みたい。

最初の二章では、土方日記との対比、「離島への航海」などを検討する形で作品の時代背景を辿る。第三章では、少年に罰された流刑の〈異常〉的な形式の分析を通して作品における悪党ナポレとの旅の必然性を明らかにする。第四章では、作中人物の関わり方を追究する流れで特にナポレオンの姿勢、そして「私」の悪党少年に対しての意識形態を視野に入れる。第五章でまずは、風景の感覚の急変と、それに伴う「私」の心境の変貌を連続した文脈を讀解した上で、H環礁の場面で「私」の

異様な振る舞いから捉えられる主人公とナポレオンとの〈ロールチェンジ〉のモメンタムを二人の関係性の分析起点とする。終わりには、作品での〈環境を克服する〉の主題に迫り、作者の意図を考察する。

一 「ナポレオン」と土方日記

土方久功は、二九歳の時（一九二九年三月）にパラオ諸島に渡りそこに住み始めた。一九四一年にコロール本島で中島敦と知り合い、翌年三月と一緒に帰国した。パラオ滞在中の中島にとって土方は、様々な面で重要な存在として見做されていたと考えられる⁷⁾が、土方自身も中島に対して同様の感慨を抱いていたであろう⁸⁾。長年のミクロネシア滞在中で、南洋を熟知しパラオ語を自由に話すことができた土方は、友人としてのみならず、中島自身の南洋知識とそれに依った作品のための素材を与え得る役割をもっていた人物でもあった。こうした間柄において中島は、友人の日記の読書を許されるようになる。中島日記の一九四一年十二月一九日付に「夜、土方氏方に到り、南方離島記の草稿を読む、面白し」⁹⁾と記されている。同日付の記述から中島は、土方日記中「南方離島記」のなかから、少なくとも少年ナポレオンとヘレン環礁に関しての文章を読んだことが窺える。確かに中島「ナポレオン」では、「南方離島記」中のヘレン環礁及び少年ナポレオンに関わる描写が主な素材となっている¹⁰⁾。では「南方離島記」で、土方はどのような経験を語っているのか。

土方久功は一九三九年九月二九日から一〇月七日まで南方離島の旅に出る。日記の一〇月七日付に記述されているように、土方はパラオから「国光丸ニ乗り、「ソンソル」「メリー」「プル」「トコベイ」「ヘレン」「メリー」「ソンソル」」¹¹⁾という航路でコロールへと帰ったのである（諸離島は現在ソンソロール、メリール、プロアナ、トビ、ヘレンと呼ばれている）。こうした旅の中、少年ナポレオンとの出会いの場面は次のように要約できる。

国光丸汽船で航行している「私」は十月二日（朝）に先住民が極めて少ないという「プル」島に着く。先住民の間に「十三四才ニナルパラオ人ノ子供」ナポレオンがいる。少年は「悪性ナ窃盗常習ノ為ヲ以テ」この「プル」島に流刑されているが、「三年ノ刑期ヲ既ニ二年近く」経っているのに「一向本心カラ悔イテ改メヨウ」としていないように「私」には見える。「私」は彼に日本語で話しかけてもパラオ語で試しても話は簡単に通じないが、しかし分からないという少年を「私」も船長もあまり信じない。他方、少年があまりにも自然とプル語で話すので、自分の生まれた島の言葉さえ忘れた可能性すらあると変に思いつつも無理はないと「私」は考える。少年の「運命的」な「悪」を考えるだけで「世ノ中ノ一番真暗ナ一面ニブツカッタ様」に感じる「私」は、一時間の後にナポレオンを「見捨テテボートニ乗ツタ」。

「南方離島記」は、文学的作品というよりも当時の南洋群島に関わる情報に富んだ興味深い紀行文となっている。客観的な報告文が数多く含まれているこの紀行文の内容から、民俗学者である土方の現地の理解の奥深さを感じ取ることができ、中島の作品「ナポレオン」とは性格の異なるものであるといえる。確かに、土方の日記と中島「ナポレオン」には複数の類似箇所を見て取ることができるが、まずは次章では、二篇がほぼ同じ世界を叙述する箇所、つまり舞台・南洋群島の時代状況を語っているところから触れていきたい。

二 離島への航海について

諸離島を往復する国光丸は「ナポレオン」で「年に僅か三回位しか通わない」とされているが、土方日記では「一年四回乃至五回」¹²⁾と記述されている。コロール本島で南洋庁が設置する一九二二年に初めて離島線命令航路が開設されるが、一九三二年南洋庁出版の『南洋庁施政十年史』では、同年「西カロリン群島線」の「パラオ離島」という航路は年二回（定期）「パラオ、ソンソル、メリー、ヘレン、トコベ」¹³⁾の島を寄港地としていたことが指摘されている。一九三二年からは、パラオ離島の航海は年四回に増加するが、その際に「プール」即ちプロアナ島も寄港地として加えられた¹⁴⁾。この航路は「南方離島記」で記述されるものと同様の航路であり、また「ナポレオン」での航路のモデルになっている。

「南方離島記」では、国光丸の南方航海の主な目的は、離島の島々からコプラを集めることと人頭税を取り立てることであるとされる。一方「ナポレオン」では、諸離島の人頭税¹⁵⁾を取り立てることと「ナポレオンを召捕りに行く」ことが航海の目的であるように描かれているが、この義務を果たす者は警官である。「南方離島記」でも、南洋群島の警官の役割などについて言及されているが、国光丸で土方と警官が同船していた記述は見られず、また中島「ナポレオン」に描かれている島民巡警の人物も見られない。一九四〇年出版の *Pacific islands under japanese mandate*¹⁶⁾ によれば、ドイツ統治時代から先住民を徴募する政策があったが、内地の警官と先住民の「巡警」とを一人ずつ組んで警備する制度は日本統治時代、南洋庁の設置以来のことで、一九三五年に南洋群島エリアで五〇名の先住民が採用されていたそうである。

さらに、「ナポレオン」では警官の主たる義務とされる「人頭税取立て」に加え、国光丸も船として果たすべき義務があるように捉えられる。H島に寄港する際に「高瀬貝採取権を独占してゐる南洋貿易会社からの頼みで」と表現されることから、離島の交通と南洋貿易会社とに何らかの利害関係があったことが窺える。

軍政及民政時代に老ては（中略）離島航路としては、南洋貿易株式会社に於て、コプラ其の他、貨物等の運搬の為に運航するものもあったが、之等は何れも定期航海を為すものではなく、南洋庁設置と共に、海軍も亦撤退したので、南洋庁は定期的に運搬せしむる為、命令航路を開設し、之に補助金を下付することとした。¹⁷⁾

右記の資料から、離島との航海交通を開設する前から南洋貿易会社はその運航によって利益を得ていたことがわかる。南洋庁の設置以降も、一九三〇年代に渡って当社が船を就航していたのであり（前掲書、四三二頁）こうした状態が少なくとも一九三〇年末まで変わらないことがまた M. PEATTIE の研究からも窺える¹⁸⁾。

ところで、国光丸は土方日記によればコプラ「ヲ集メテ歩ク船デアツテ、オ客ヲ乗セルヨウニハ出来テ居ナイ船」¹⁹⁾である。国光丸はすなわち、土方がもらった「上等室（三人ベッド）」と「会社ノ監督者」の「小部屋」以外に「モウ外ニハーツモ船室ト云フモノハナイ」ような船で、決して観光向きの汽船ではなかったことが窺える。対して「ナポレオン」では、国光丸の描かれ方において——中島が視察旅行で乗船した船の様子²⁰⁾も織り交ぜられたであろうが——船の機能（運搬など）よりも船上での人間関係の方が重要視されていると言えよう。すなわち土方日記での国光丸は「オ客

ヲ乗セル」ための船ではなく、コプラや他商品の運搬船として描かれるが、「ナポレオン」では「一等」の部屋が（したがって二等室、もしも三等室も）整備しているところに国光丸中での社会的な次元が浮かび上がらせられている。そして「上等室ヲ取ッテ」とある土方日記と違って「ナポレオン」の主人公が一等船客である（したがって二等、もしも三等船客もいよう）ところには国光丸のこうした社会的な次元において上下関係で機能する秩序的な側面が強められて表現される。「内地人」である「私」と警官「二人だけが一等船客」であり、その他の人物すなわち島民巡警（ずっと「我々の傍に立」ってはいるが一等船客ではない）や、船に入れ違って乗り降りする「島民」たちなどが二等もしも三等船客であろうが、船客全員が乗船している国光丸とは物語の舞台、統治下南洋群島の縮図ミクロコスモスを想起させる。

三 帝国内におけるナポレオンとの旅

二章で明らかにしたように「ナポレオン」と「南方離島記」における国光丸の航海に関する数カ所が似通っているが、それぞれの主人公は全く異なる性格の旅を経験する。それが明らかになるのは、二篇における悪党ナポレオンの描かれ方の相違である。

中島作品で少年の悪事——先住民を脅かして、巡警と警官に逆らい、脱走未遂により国光丸の航行さえ遮るなど——は、物語の展開において作中人物と出来事とを繋げている。言い換えれば「ナポレオンを召捕りに行く」との言葉から始まる「ナポレオン」は、諸離島S島・T島・H環礁へと進む旅の流れでの悪党少年の形象を中心に展開するのであり、末尾に手を振る少年の姿で結ばれる。対して「南方離島記」でのナポレオンは、旅行記の一部のみに登場し、一旦「プル」に「見捨テ」られたら「私」たちの日程や旅行記全般の展開に対して関わりを持たない人物である。

作品「ナポレオン」で旅のこうした展開を可能にする要素は、悪党少年の流刑である。次に物語での「流刑といふ古風な刑罰」の異常性とその役割に注目したい。

その上流竄地をS島よりも更に南方遙か隔たつたT島に変更することに決めたためである。
 (中略) 内地人の乗ることなど殆ど無い・そして年に僅か三回位しか通はないこの離島航路の小船に乗つたのであつた。

重い罪を犯したという罪人を文明の中心地から離す形式の流刑とは様々な文化で成立したしきたりであり、同様に東西の文学に描かれた²¹⁾ものである。こうした形式の流刑とは「ナポレオン」で、植民地である南洋群島という舞台においては独特であり若干調子はずれなところもあろう。『ミクロネシア民族誌』によれば、重い罪の場合に刑罰を受けたものは「族から除かれることで(中略)他族に寄寓して一生を奴隷の境遇で暮さなければならぬ」²²⁾という古い習慣がミクロネシアにあったそうであるが、流刑とは植民地時代に現れる現象であろう。ドイツ占領時代のミクロネシアで研究していた民族学者A.KRÄMER(一八六五～一九四一年)は、複数の研究書で離島から主要島への流刑^{exile}²³⁾について言及し、また矢内原忠雄『南洋群島の研究』²⁴⁾では、「独逸時代には風害罹災地の救済、犯罪人の処罰等の意味を兼ねて、政策的に離島民を主要島に移す事例について指摘されている²⁵⁾。以上のKRÄMERと矢内原の研究から、植民地南洋群島での流刑若くは「移し」はすべて離島から

主要島へ²⁶⁾ という形の移動を持つことがわかる。一方、中島作品では逆に主要島から離島へという形式の流刑が描かれている。こうした事例については作品の素材である土方「南方離島記」でも記述されていない。「南方離島記」での少年はプロアナ島へ三年間の流刑に処せられるが、対して中島「ナポレオン」では流刑地がS島からT島へと変更され、また二年間の罰では足りず一年が足される経緯が語られている。中島は物語の構想においてなぜ流刑地を加え刑罰の時期を延長したのか。その理由は物語の展開もしくはその〈英雄〉ナポレオンの魅力に探るべきであろう。物語での流刑地の変更は「私」とナポレオンとが関わる時間を延長させるという効果を導く。以下に触れるように作者は土方日記で描かれた悪党少年の形象に深い関心をもったが、会って一時間が経つと「見ステ」られたナポレオンを語る「南方離島記」という素材に基づきながらも、自作品のナポレオン像を深化させるために〈空間〉を延長する必要があったのであろう。少年の深化が土方日記で唯一の場所である「プル」島を舞台とするのではなく、離島から離島へと移動しつつ乗船客同士で摩擦を起こしながら、ある種のダイナミズムを生じさせた展開で表現される。そして船にいる全ての登場人物たちが始終関わり合って共通した方向に向かい、同じ〈運動〉²⁷⁾の巻き添えになっていることは、土方「南方離島記」に見られない展開である。ナポレオン像を深化させるための工夫は、すなわちS島からH環礁を経て更にTへという〈ナポレオンとの旅〉であった。

ではこうした旅の間に中島はどんな悪党少年を語ったのだろうか。次にナポレオンへ向けられる「私」の眼差しを分析したうえで、少年と作中人物との関わり方を探っていきたい。

四 植民地と言葉——ナポレオンと「普通の島民」と

「南方離島記」の主人公は少年に出会うときまで彼について何も知らないようだが、対して中島作品では「ナポレオンを召捕りに行く」と冒頭にあるように「私」が悪党少年と出会う前にナポレオンに関する情報が提示される。次に、語りでの〈言葉〉²⁸⁾の多義的な性格に注目し、少年に出会う前の「私」にとって〈ナポレオン〉とは一つの名前若しくは〈言葉〉でしかない場面に着目する。

島民には随分変つた名前が色々ある。昔は基督教の宣教師に命名して貰ふことが多かつたので、マリヤとかフランシスなどといふのが多く、又、以前独逸領だつた関係からビスマルクなどといふのも時にあつたが、ナポレオンは珍しい。

作品の冒頭に挙げられる「ビスマルク」、「フランシス」、「ココロ」などの名は「基督教の宣教師」や「独逸領」、すなわちスペイン統治、日本統治などというように他国によって次々と占領された南洋群島の背景を連想させる。一方、この箇所では「私」の植民地主義的（無）意識を浮かび上がらせてもいる。「私」の思い浮かべる名は、どれも土着の名前ではなく、全てがしかも順番に南洋群島を支配した国の言語圏の名である。もっとも「私」が、日本語の普及者²⁹⁾、つまり植民地において言語を普及³⁰⁾する者であると仮定して、植民地の成立における〈言葉の権威〉を無視することが考え難い。こうした先住民の形象は被支配的なニュアンスに結び付くであろう。しかしながらナポレオンとは、「何といても堂々たる名前には違ひない。もつとも、その余り堂々とし過ぎてある点が可笑しいのには違ひない」と表現される。フランスの大將を想起させる少年の名は、確かに「マリヤ」

や「ココロ」の名に比べれば〈普通〉の名前ではない。皮肉にも圧政者の名前であるとともにミクロネシア海の魚の呼び名でもある (Napoleon fish)。しかし南洋群島の小ナポレオンは圧制者では無論なく、彼の名はミクロネシアの被支配と無関係な国からくる名前であって、つまり植民地史的な観点の範疇に含められない名前である³¹⁾。ゆえに少年の名が堂々し過ぎて響きが可笑しいのであろう。では、ナポレオンとの出会いから主人公はどのような印象を受けるのか。

作品で「ナポレオン」という名前は島民の名前の中で独特とされ、また少年の態度や性質自体も「普通の島民」に見られないものとされる。次に少年の描写を引用したうえ、作者の自筆草稿を踏まえながら物語での「普通の島民」と少年ナポレオンとの関係について考察する。

島民としては甚だ眼が小さいが、ナポレオン少年の顔は別に醜いといふ訳ではない。さうかと云つて (大抵の邪悪な顔には何処か狡い賢さがあるものだが) 悪賢いといふ柄でもない。賢さなどといふものは全然見られぬ・愚鈍極まる顔でありながら、普通の島民の顔に見られる・あのとほけたをかしさがまるで無い。意味も目的も無い・まじりけの無い悪意だけがハツキリ其の愚かしい顔に現れてゐる。

自筆草稿において、悪党少年に対する「私」の印象を表現しようと試みる際に、文字を消して書き直してはまた消していくという風に、中島は言葉の表現に苦勞していたとみえ、かつ、この箇所を重んじていたと捉えられる。自筆草稿で同じ場面を表す箇所を復元すると次の文章を読むことができる。なお、執筆過程で枠外に後から挿入されたとみえる部分を抜き出し、枠内に書かれてから抹消された箇所を挙げた。抹消箇所に下線を付した³²⁾。

一寸見たゞけで、如何にも邪悪そのものといった印象をナポレオンの顔は与えた。大して醜いといふ譯ではない。さうかと云つて悪賢いといふ柄でもない。賢さなどといふものは全然見られぬ・愚鈍極まる顔でありながらとほけたをかしさがまるで無い。意味も目的もない・悪意だけが、ハツキリその愚かしい顔に現れてゐる。

自筆草稿では、少年は「ナポレオン」として表れ、賢さのない愚かしい顔をして悪意の印象を与えるように描写される。土方日記での少年の総体的な描写に比べても大して変わらない。しかし決定稿では、少年は名前に加えて「島民として」と表現され、または「普通の島民」との対比で形象された。そして彼の「悪意」は最後に「まじりけの無い悪意」とであるとされた。「普通の島民の顔に見られる・あのとほけたをかしさがまるで無い」という言葉によって作者は島民ナポレオンと「普通の島民」とを対立的に区別する文脈を織り交ぜている。

物語でこうした〈普通の島民〉のレッテルを担うものは内地人警官の部下「島民巡警」——「(二十歳になつたかならない位の、愚鈍さうな若者だ)」——であろう。巡警とナポレオンとの対立関係が見えてくる主なエピソードはT島に上陸する前の喧嘩の挿話である。

ナポレオンは大人しく立上ったが、巡警が尚も其の腕を取つて警官の方へ引張らうとした時、憤然とした面持で、島民巡警を不自由な肘で突き飛ばした。

少年の憤慨について山下真史は「同じ島民でありながら、完全に日本人警官の手先となつている巡警に対する怒り、持っていて然るべきプライドをなくしていることへのまっとうな抗議」³³⁾と指摘しているが、ナポレオンと〈普通の島民〉巡警との対立関係を右に述べた〈言葉の権威〉の側面からも考察できよう。物語で巡警は被支配者と支配者とのやり取りを通訳する形でその義務を果たす。要するに巡警の資格に必要な不可欠な条件は日本語力である。こうした巡警に逆らうナポレオンの形象を加味すると、少年は、日本語を忘れた故、あるいはもしも日本語を忘れたふり³⁴⁾をしているならば、植民地の実態に属する〈言葉の権威〉に抵抗すると言える。

五（一） 南洋の風景を眺める——「南方離島記」という典拠

風景の描かれ方は「ナポレオン」の文脈において決定的な役割を果たしている。作品の骨組みであり、「私」の視点から表現される「風景」は、「南方離島記」中の風景の描写と類似している箇所が多い。こうした〈風景〉の中で中島は素材である「南方離島記」に創作を施し、文脈を織り交ぜたのである。本章でまずは、作者の創作的技法をめぐる風景の組み立て^{アッサンブラージュ}を検討しながら、物語で文芸的創造道具として扱われる典拠の価値について考察したい。次に登場順序にS島とT島が描写される箇所を見ていきたい。

S島は人口も極めて少く、それも年々減少しつつある、謂はば廢島に近い島なのだが、僅か十五六歳の少年一人を抑へかねる程、住民等も元気が無いのであろうか。

汽船目懸けて素速く漕寄せて来る数隻のカヌー、其のカヌーから船に上つて来ては船員の差出す煙草や鯛の缶詰などと自分等の持ち来たつた鶏や卵などを交換しやうとする島民共、さては、浜に立つて珍しげに船を眺める島人等。それらは何処の島も変りはない。

上の箇所は、以下の土方日記での「プル島」の叙述箇所に類似している。

コノ島ニハ島民ガ十八・九名シカ居ナイノダ。(注5前掲、一〇月二日付)

荒涼タル浜デアル。島ノ西側ノ小サナ一部ニ三軒カ五軒ノ小屋ガアリ、二人ノ老人ト二人ノ中年者ト、ソシテ三人ノ青年ト、ソシテ全ジ位ノ女ト若干ノ子供トガ住ンデ居ル。(中略) 彼等八十俵バカリノ「コブラ」ヲ造ツテ置クコトニヨツテ、僅カナ金銭ヲ得、ソレガ彼等ノ禪トナリ、女達ノ簡單服トナリ、煙草トナリ、マツトナルノデアル。是レガ外カラ見タ彼等デアル。(同上)

S島は位置的に土方日記中の「ソンスル」島に相当するとはいえ、その風景は土方日記の「プル島」の描写を素材としていることが窺える。T島も同様に位置的に土方日記の「トコベイ」島に相当するが、T島に当たる描写——「島民共」や船員たちとの物々交換など——は、実際土方が同じ「プル島」で眺めた風景に基づいている。すなわち「プル島」の風景をめぐる一個別の描写が中島作

品の創作過程において複数の風景を描くための素材になったことが理解できる。右記の中島日記では「南方離島記の草稿を読む」とあるが、そこには「ソンソル」島と「トコベイ」島（つまり中島作品でのSとTの島）についての記述がなく、「プル島」で会った「ナポレオン」と「ヘレン礁」についてのみ記述・メモされている³⁵⁾。次に、二篇におけるH島と「ヘレン礁」の描写について考察したい。

幾らでも、全く可笑しい位幾らでも、捕まるのだ。嘴の赤くて長い・大きな白い奴を（中略）何十羽となく捕へては離し、捕へては離しした。

本当ニマタタク間ニ私達ハ、其ノ白イノ、黒イノ、ソシテ大キイノ、小サイノヲ両手ニモチキレナイ程、手掴ミニシタ。（土方日記、注5前掲、一〇月四日付）

S島とT島の描写に対して、作者の日記に概要的にメモされていた「ヘレン礁」の場面は作中のH島とは位置と描写が、または二つの文章における「私」の視点とが一致している。H島の場面では、中島と土方の文章はともに船上という離れた視点から「ヘレン」及びH島の風景を描く文章が極めて短く、上陸してからの島での出来事の描写が中心的で、主人公の視点が視覚の対象の間近にある。中島はつまり、風景の描写においては、土方日記に乗っ取った書き方をしている。S島とT島の場合に、中島は自身で眺めることのなかった複数の風景の描写において徹底して空想を土台に描くより、なるべく体験による土方日記の記述を踏まえ風景を組み立てていったと考えられる。またH環礁の場合に、土方日記という典拠における「ヘレン礁」の描写——「両手ニモチキレナイ程、手掴ミニシタ」——とは異なる視点からの表現が出来ず、鳥を捕まえるほどの短距離からのみ基づくことの出来る描写である。従って船から降りて鳥を踏むように物語は展開していく。これまで「ナポレオン」における風景の描かれ方から中島の作風に特徴づけられる典拠の重大さ³⁶⁾に触れてきたが、次章では物語でこうした風景^{フレイム}の中に展開する出来事がどのようなニュアンス^{シェイプ}で表現されているかを追究したい。

五（二） 南洋の風景に入る

ナポレオンがS島で捕まり国光丸に乗せられてから、出帆の僅か後に少年の脱出未遂のエピソードが描写される。甲板から少年の脱出を眺めて「島内の森の中へでも逃げおほせて呉ればいい」と思う主人公の形象から少年に対する関心、好意と共感が表現される。ところが、「どうやらそんな事を考へてゐたらしい自分に気が付い」という主人公のナポレオンに対する感情は、半ば無意識的に浮かび上がるように読み取れる。次に、船に戻されたナポレオンの身動きが不自由にされたあとのH環礁の場面における「私」の〈異常〉な姿勢に着目しながら悪党少年に対する主人公の感情のあり方を探りたい。

私は唯無性に嬉しくなり、むやみに走り廻つては彼等を追ひかけ廻した。幾らでも、全く可笑しい位幾らでも、捕まるのだ。嘴の赤くて長い・大きな白い奴を一羽抱きかかへた時は流石

に少し暴れられてつつ突かれはしたが、私は子供の様に喚声をあげながら何十羽となく捕えては離し、捕えては離した。

鳥の島 H に寄港する段階で、ナポレオンの活動する場所は島からいわば（非）活動舞台の船になり、「麻縄で縛り上げられ」身動きが取れない。彼は船上で、丸二日間の「ハンガー・ストライキ」に耐えて子供とは思えないような決意を見せる。同時に「私」の対照的な形象が浮かび上がる。ナポレオンが縛られるまでの「私」は、上陸せずに船から離島の風景に視線を向けて傍観的な姿勢をとっているが、H 環礁の場面では「私」の活動舞台が船から島に代わる。H 環礁で身動きを自由に、「唯無性に嬉しくなり」、「子供の様に喚声をあげながら」鳥を追いかける「私」の心境の変化が描写される。ナポレオンが不自由にされている間に、子供のように走り廻り、環礁の平静を乱す「私」はまさに悪党少年の立場に代わるのであり、自分の振る舞いによって少年とのロールチェンジ³⁷⁾を起こす。ところが、H 環礁で「無性に嬉しくなる」「私」はそれをあまり意識していない。ナポレオンがかつてそうしていたように振る舞う「私」は、船で「両手両足を船の麻縄で縛り上げられた」ナポレオンのことを全く思わないからである。とはいえ、船に帰った直後の「私」の眼差しはひとまず悪党少年の居場所に向けられ「幸い、そこは陽の射さぬ所だつた」という風に改めて少年に対する先の半ば無意識的な感情・関心が再び表現される。

無人島 H の場面におけるロールチェンジはまた、そこでの風景の感覚の変化と整合する。国光丸が S 島また T 島に寄港するとき、「私」は上陸しないまま、乗船から島へという隔たった視点よりそれぞれの離島の風景を眺める。ところが、〈鳥の島〉H 礁が見えてきたら、「無人島 H 礁の環礁の中に入った」と表わされるように離島への眼差しは遠景にとどまらず直ちに距離を縮め、視点が島のなかに置かれる。視点の置かれ方をカメラの撮影に例えれば S 島と T 島で〈風景を眺める〉ことから H 島で〈風景に入る〉というズームインが起こるといえる。同じ場面で風景の感覚が変わるとともに H 環礁に足を踏み込んだら「唯無性に嬉しくなる」という「私」の心境が変貌する瞬間^{モメンタム}が描かれている。こうした瞬間に H 環礁での風景の〈ズームイン〉に伴い「私」の内面的な側面が見て取れる。己の含まれない風景の展望的な描かれ方から、己の含まれる風景の局分的でしかし詳細で富んだ描かれ方への推移は、「私」のナポレオンへの半ば無意識的な関心・誘引、すなわちナポレオンが持つ魅力のある〈特別もの〉を再現させようとする「私」の内証的で半ば無意識的な希求の表現として捉えられる。では、「私」にとってナポレオンがどのような魅力を持つか。

物語でそれは「環境に適応する（といふより之を克服する）不思議な才能」として表現されている。こうした適応力は更に克服する力にまで強められて表現されることが興味深い。環境への適応力に欠けている「私」³⁸⁾は、今ここに生きて新しい環境に適応する才能を発揮するナポレオンのこうした性質に何よりも惹かれていると言えるであろう。「環礁」における「私」とナポレオンとが適応力の有無により対照化している。

以上をまとめると、風景の焦点が絞られる H 環礁において「私」の内面的で半ば無意識な側面が浮かび上がる。それはナポレオンが持つ〈環境を克服する〉才能に対する「私」の関心・憧憬として捉えられる。子供・ナポレオンが想起させる若さ、無邪気さ、また環境への適応力の希求を半ば無意識的に満たそうとする「私」は、H 環礁に踏み込んだら〈代わりに〉自分のなかの（無邪気で環境を克服できる）少年が蘇るのである。

中島「ナポレオン」の末尾に、国光丸に向かって手を振る少年ナポレオンの風姿には、少年の無

邪気さが読み取れる。ナポレオンのこうした形象は、どこからも離れて「南方遙か隔たった T」離島に残された少年がどうなるのかという心細さをもよおす。パラオへ向かう大人・作中人物から背を向けられた子供・ナポレオンの形象に、南洋群島の運命を象徴した激動の世界・時代に曝されそうになる無邪気さとそれに結びつく〈明日〉への不安の感覚がつかみ取れる。しかしながら、この不安とともに、どの環境にでも適応できる子供・ナポレオンのこうした姿にこそ、〈今日〉とは異なった連続の可能性を呈する——より楽観的な——〈明日〉への希望を垣間見することもできる。こうした楽観的な衝動というべきものは始終物語を通底し、中断しかける場面でもすなわち H 環礁で少年の身動きが不自由になる時にさえ、今度は代わりに「子供の様に喚声をあげながら」少年とのロールチェンジを生かした「私」の形象を通して継続するように捉えられる。静止状態から運動状態へと変動していくなか、運動状態に変わる場面で必ず秩序を乱し、そしてまた元の静止状態に回帰させられる二人の形象にはまさに、環境にそのまま適応するのではなく「之を克服する」という動機の文脈が捉えられるのであり、より総体的に言えば〈今〉の秩序を変えようとした腕き struggle がサブテキストとして読み取れる。

終わりに——環境を克服するという不思議な才能

〈環境を克服する〉才能の持ち主であるナポレオンと適応性の低い「私」との関係の描かれ方に南洋群島滞在中の中島自身を投影する³⁹⁾ ところがあるが、最後に少年の「悪性」を視野に作者と作品の関わりについて考察を試みたい。

「南方離島記」では、少年像の「悪性」をめぐる「運命」と「環境」の主題が描かれるが、土方日記では明らかに少年の悪性が「出来心や環境」よりも「ヨリ運命的ナモノ」⁴⁰⁾ といわば一次的にみられるのである。その一方で「ナポレオン」では、少年の形象をめぐる「嗜虐症的な悪戯」や「窃盗など」を働く〈悪党〉と、末尾に国光丸に向かって手を振る〈子ども〉の描写のコントラストにおいて少年の悪性の二義的な捉え方が読み取れる。山下真史によれば、中島の描くナポレオンの悪性が土方日記にある「運命」ではなく環境に因るもので、また「ナポレオンを「悪」に追い込んだ環境が何かは、言うまでもない」⁴¹⁾、つまりミクロネシアを支配している植民地主義日本を「環境」として措定されている。植民地が「環境」として作品の文脈に関わっているという氏の見解を時代的な視点から捉えるならば、概ね同意するが、より幅広く作者の文学を俯瞰すると中島における「環境」の問題は植民地主義のみに属さないテーマであり、作者の青春期を遡る、より根本的な問題だと考えられる。作者の日記的な作品「プールの側で」(『中島敦全集②』筑摩書房刊 二〇〇一・一二)を引用する。

ある日、三造が妹と女中とで夕飯をたべてると、父と新しい母とが外から帰ってきた。(中略)彼等はみやげだといつて蒲焼のおりを三造に与へた。それがまた理由もなく彼の気持に反発した。彼は苦い顔をして一口それを食べた。それから、その残りを卓子の下にいた猫に与へた。突然、父が黙つて立ち上がった。そして咽喉を鳴らしながら食べてゐる猫を蹴とばし、三造の着物の襟を左手でつかむと、右手で続けざまに彼の顔を三つ四つ殴つた。(二二二～二二三頁)

「学校ができるかと思つて、あまり生意気な真似をするな。」と、五年生の一人が彼に言つた。(略) 自然に動悸が高まり、顔色が蒼くなつてくるのを、彼は感じた、さうして、眼だけは外さずに、強く、彼等の一人を見詰めてゐた。(二三二頁)

「プールの側で」では、作者の自画像と看做される⁴²⁾三造は、「八年ぶりで京城の地を踏」み、京城中学校時代の自分を思い浮かべるが、養母のことや京城の転校など、中島の青春期を想起させるところがいくつもある。中島敦は早い時から父の転勤に伴い東京、奈良、静岡、ソウルという風に次々と転校することを余儀なくされ、新たな地に置かれてはそこでの常識に慣れるべく人間関係を徹底的に作り上げねばならなかつたであろう。そして環境への適応力とは彼にとって重要な課題であつたと考えられる。ところで、「南方離島記」の悪党少年は「十三四才」だが、中島は自作品での少年の年を一五、六歳に変えることは示唆的である。それはすなわち、中島の自画像・京城中学校時代の三造の同じ年齢である。こうしたナポレオン少年と「プールの側で」の語り手三造像をめぐる、次の共通主題が見て取れる。どこの環境にも適応出来る少年ナポレオンは、廻りの人間に対しての悪事が〈原因〉で島から島へ流される。対しての少年三造は、次々と引っ越すことが〈原因〉で、新しい環境・学校での人間関係が上手くいかず「生意気」と見られ、また家庭のなかでも父と新しい母に反発し喧嘩が生じるなど、人に「悪い」とされる。もちろんこうした三造像でさえ〈環境を克服する〉ことは重要視されるように読み取れる。「悪性」と「環境」の因果関係がほぼ逆になっている二篇において、「プールの側で」では、環境の問題は、主人公三造により直接的に表現され、それに適応できない三造自身の切なさを中心に語られる。「ナポレオン」では、少年の内面が明らかに描写されない代わりに、同じ主題は少年を悪党と見るのに多少統一している警官たちという大人の集団（「私」もある程度この集団に含む）の判断を通して間接的に描かれているのである。

「悪性」は必然的なものなのか環境によるものなのか。ナポレオンと三造、二人の少年像をめぐる「悪性」と「環境」の複雑な因果関係が平行している二篇の中の世界において、この問いは未解決の問いとして通底している。大正期の京城が舞台である「プールの側で」と昭和一〇年代の南洋群島舞台の「ナポレオン」の二篇、それぞれにおける家・故郷から新たな場所への移動をめぐる問題的な環境（三造が生きる家庭・異校——ナポレオンが生きる植民地・流刑）と時代を経た作者の苦悩が読み取れる。

南洋群島滞在期の中島が土方日記における多数の記述のなか、ナポレオンについて語る短い文章を自作品の素材とし、また悪党少年の形象に幼稚な側面を合わせて〈環境を克服する〉というモチーフを織り交ぜたのは、その当時の彼自身がこの主題に敏感であつたからだと考えられる。こうした環境と時代に「適応する（といふより之を克服する）」ことに「不思議な才能」が要るほど難しい課題だと中島には思われたであろう。

付記

*傍線部は発表者による。引用文のうち、(中略)は省略を、/は改行を示す。

本論は「近代文学研究会」(本学衣笠キャンパス、二〇一六年六月二日)及び「日本文藝学会」(西大学院梅田キャンパス、同年九月一〇日)での発表をもとに加筆修正して作成したものである。会場内外から多くのご教示を賜った。記して感謝いたします。

注

- 1) 「中島敦 任南洋庁編修書記 給三級俸 昭和十六年七月六日」(田鍋幸信編『写真資料中島敦』創林社一九八一・一二)。
- 2) 現地で使用された教科書の研究については橋本正志『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』(おうふう二〇一六・九、八五～一二七頁)を参照。
- 3) 濱川勝彦「『南島譚の世界』」(『中島敦の作品研究』明治書院 一九七六・九、二〇八～二一四頁)。
- 4) 近年では川村湊(「南島譚の世界」『狼疾正伝中島敦の文学と生涯』河出書房新社 二〇〇九・六、二九〇～二九三頁)、山下真史(「『南島譚』『環礁』論」『中島敦とその時代』双文社出版 二〇〇九・一一、一七六～一七九頁)、杉岡歩美(「『真昼』から「ナポレオン」「マリヤン」へ」『中島敦と〈南洋〉—同時代〈南洋〉表象とテキスト生成過程から—』翰林書房 二〇一六・一一、一〇〇～一〇八頁)が「ナポレオン」を論じたが、土方日記との関連には分析を施していない。
- 5) 須藤健一・清水久夫編『土方久功日記Ⅴ 国立民族学博物館調査報告124』国立民族学博物館(遊文舎 二〇一四・一二・二五)。
- 6) 清水久夫「中島敦『南島譚』とその素材としての「土方久功日記」」(跡見学園女子大学文学部紀要第五二号 二〇一七・三・一五、九三～九六頁)。
- 7) 中島の作品「マリヤン」では、「私の友人とっていいのはHの外に一人もいなかった」(二八五頁)とあるが、その「土俗學者H」とは土方であろう。なお、〈環礁〉収録の短篇の引用は全て『中島敦全集』第一巻(筑摩書房刊 二〇〇一・一〇)による。
- 8) 「その短かいあいだに「トン」は私には、あの無くてはならない筈の友達になっていたのだった」(土方「トン」鷺只雄編『中島敦〈叢書 現代作家の世界 五〉』文泉堂出版 一九八五・七、二〇六頁)。
- 9) 「日記」『中島敦全集③』(筑摩書房刊 二〇〇二・二)。一九四二年一月一九日付。
- 10) 濱川は物語のS島・H島・T島のモデルが、ソンソロール(Sonsorol)島、ヘレン(Helen)環礁、トビ(Tobi)島であると推察し、作者がこれらの離島まで行った可能性を否定している(注3前掲書、二〇八～二一四頁)。当時は未だ参照出来なかった土方の日記からも、「南方離島記」の執筆が中島「ナポレオン」に先立つことや、二つの文章で記される離島の位置などを確認できる。
- 11) 注5前掲書、一一五頁。
- 12) 注5前掲書、十一月一日付、一四三頁。
- 13) 南洋庁長官官房編『南洋庁施政十年史』(南洋庁 一九三二・七)四三二頁。
- 14) 注13前掲書、四三四頁。
- 15) 南洋群島の租税制度における人頭税は日本統治時代に一九一五年より制定され、一九三〇年代まで改正が(年額、身分、住居に関して)様々あったので緻密に触れないが概ね一六歳以上の先住民を対象としていた(注13前掲書、九〇～九六頁を参照)。
- 16) “Most of the officials are Japanese, with but 50 natives among the 164 police officials, 25 natives among the 84 public school teachers, and one native interpreter in the judicial court.” (YANAIHARA T., *Pacific islands under Japanese mandate*, (Translation of: 南洋群島の研究) Oxford University Press, London, 1940, p.259). なお、巡警の制度の設置、また一九二二～三二年平均の雇い巡警人数増減について注24、一七三～八四頁に詳しい。
- 17) 注13前掲書、四二九頁。
- 18) PEATTIE, M. R., *Nan'yō: the rise and fall of the Japanese in Micronesia, 1885-1945*, Honolulu, University of Hawaii Press, reprint Ed. Jun 1996 (1st Ed.1982) p.144-9.
- 19) 注5前掲書、九月一九日付。しかし、その日に国光丸には、例外的に「百人余ノ人々」が乗っていた。「此ノ人々ハ今度南洋拓殖会社ガ燐鉍採掘ヲハジメル為ニ、「ソンソル」島ニ行ク人夫達デ、沖繩ノ人が大部分ヲ占メテ居ル」と土方が記し、彼らの状態をこう叙述する。「私ハ此ノ人達ガ——中ニハポツポツ女人モ居ルガ——横ツケニナッタ「サンパン」(発表者——平底で甲板のない小寄木船)カラ荷物ト一緒ニ、此ノ「デッキ」ニナダレ上ッテ、其レ其レノ席ヲ探シテ落着キコム有様ヲ見テ、小サナ、併シ真実ナ生活戦線ノ縮図ヲ見セツケラレタヨウナ気がシテ、ホットスル。」
- 20) 九月一五日に中島が視察旅行関係で乗船したパラオ丸は、極めてもてなしの良い船だったと PEATTIE

- は述べている。“To the novelist-turned-bureaucrat Nakajima Atsushi, who took the same ship westbound toward Jaluit in the autumn of that year, the Palau Maru offered a luxurious haven from the scarcities and war jitters of Palau, his duty station” (注 18 前掲書、一四七頁)。
- 21) 例えば京都から遠島に送られる喜助の変遷を描いた森鷗外『高瀬舟』と、エドモン・ダンテスが投獄されるイフ島を語ったアレクサンドル・デュマ『モンテ・クリスト伯』が挙げられる。
- 22) 松岡静雄『ミクロネシア民族誌』(岡書院 一九二七年) 二六四頁。
- 23) "Six agitators from Ngaregolong were taken into custody shortly before, and exiled to Saipan" (*Palau. Vol. 1. Results of the south seas expedition 1908-1910*, Markus E. Locker trans; Hamburg L. Friedrichsen & Co, 1917, p.158). "In 1906 the god's priest (Ngiralūl) was exiled to Saipan, because of incitement to revolt." (*Palau. Vol. 2. Results of the south seas expedition 1908-1910*, Hamburg L. Friedrichsen & Co, 1919, p.435).
- 24) 矢内原忠雄『南洋群島の研究』(岩波書店 一九三五・十・三) 五六頁。
- 25) 矢内原は日本統治時代での流刑としての罰の存在を否定している。「然るに日本統治に入りて後はかかる政策的移動を行はざるのみでなく、独逸が刑罰的若くは政治的理由により強制移住せしめたる者をばその郷里に送還した。」(注 24 前掲書、五七頁)。
- 26) 矢内原はさらに「サイパン島ラウラウをば刑罰植民地としてサモア島其他より約六十名の犯罪人を輸送し」、また「一九一〇年にはボナペ島ジヨカージの全村民役四百人をば反乱に対する処罰としてパラオ島に移し」等の事例を指摘している(注 24 前掲書、五六頁)。
- 27) 語りでの流刑をめぐる移動のあり方に考察を加えると「ナポレオン」における遠心的な運動とジェイムズ・ジョイス『ダブリン市民』における求心的運動との並行線を引くことができよう。BRILLI A. ("Il primo Joyce: ritratti in prosa", in *Gente di Dublino* (trad. Ghirardi M. M.) Rizzoli ed., 1961) の研究で指摘されるように『ダブリン市民』では、空気・文化的に淀んでいるダブリンに不満な作中人物は、市から離れようとしたところでそれが出来ないように描かれている。語り合いでそうしたダブリンの常識やタブーから離れることができなければ、市の地形の面でも同様に、作中人物の散歩・移動する通りや広場の登場順序に注目すると彼らが求心的な力に引力され、必然的にダブリンの郊外から中心地に向かう。植民地南洋群島が舞台である「ナポレオン」では、「内地人」の「私」を含めて乗船客たちが帝国という中心より S 島または「更に南方遙か隔たった T 島」へ(植民地の〈ほぼ外〉、その境まで)と外方へ向かっている。しかしながら、パラオに戻る国光丸の乗船客である彼らが必然的に、また植民地の中心へ引力される文脈が読み取れる。
- 28) 川村湊(「南島譚の世界」『狼疾正伝中島敦の文学と生涯』河出書房新社 二〇〇九・六、二九〇～二九三頁)は、「私」とナポレオンとの関わり方を文字の有無が象徴する「現在」と「過去」の二項対立関係の面から論じている。氏はすなわち、(ナポレオンは)「言葉や文字で記憶する、あるいは記録するという意味での「過去」を一切消去するという能力を持っているのであり、彼には言語的にも常に「現在」があるだけであり、「過去」というものは存在していない」と見ているが、本章では、作品における言葉と植民地と関連性を照らしたうえで、〈言葉と権威〉のモチーフを視座として作中人物たちの関わり方を再読したい。
- 29) 主人公は、国光丸にいる理由が明確ではないが、物語で「南洋の官吏」の身であり、また「環礁」の他篇での文脈を辿れば公学校での教育と関係をもつ仕事をするものであることが見て取れる。例えば「風物抄・クサイ」では主人公の「公学校視察」(二九一頁)について書かれている。
- 30) 〈公学校〉の教育制度については、今泉裕美子の「南洋庁の公学校教育方針と教育の実態：一九三〇年代初頭を中心に」(『沖繩文化研究』第二二号 一九九六・二、五六七～六八頁)を参照。
- 31) 杉岡歩美(「『真昼』から「ナポレオン」「マリヤン」へ」『中島敦と〈南洋〉—同時代〈南洋〉表象とテクスト生成過程から—』翰林書房 二〇一六・一一)は、上記の川村論(注 28 前掲)を踏まえていると考えられるが、「ナポレオン」での「言語」に注目し、パラオ語を忘れた少年の「言語習慣」を超えた「才能」について触れている。(マリヤンと)ナポレオン少年が「〈西洋〉統治の名残を残した〈南洋〉の「名」を持つ、すでに〈文明〉化された〈南洋人〉である」と見ている氏の見解において、「文明」化は捉え方が若干分りにくい(「統治」下の意味で使用されているのではないだろうか)が、本章ではナポレオン

像をめぐる非支配的な側面に焦点を当てたい。

- 32) 作者の草稿を神奈川文学振興会編「中島敦文庫直筆資料画像データベース」(DVD-ROM 一枚 県立神奈川近代文学館蔵 二〇〇九・六)で参考した。なお『中島敦全集』第二卷(筑摩書房刊 二〇〇一・一〇)では既に、作品の草稿の復元があり、草稿における抹消と挿入の箇所がそれぞれ■と〔〕の印で指摘されている。しかし、草稿では挿入箇所である「(大抵の邪悪な顔には何処か狡い賢さがあるものだが)」は、『中島敦全集』で〔〕の印で指摘されていない。そのため、本校での復元は『中島敦全集』の復元と少し異なっている。
- 33) 山下真史「『南島譚』『環礁』論」(『中島敦とその時代』双文社出版 二〇〇九・一一、一七八頁)。
- 34) 警官によれば「あの男が(と巡警を指して)言ふにはですな、困つたことに(中略)ナポレオンの野郎、今ではパラオ語をすっかり忘れて了つとるんですと。何をあれに聞かせても通じんです。」、とあるように巡警を含めて作中人物の誰もがナポレオンの言葉(トラック語)を理解できない。しかし、巡警が少年に「何か短く少年に言つた。警官の言葉を通訳したのであらう。」の場面と「その旨を告げ」る場面からもともとと同じ「島民」である巡警とナポレオンの間にだけ、ある程度では言葉の理解が通じていることが推察できる。
- 35) この箇所から、数多い記述で構成された「南方離島記」を、中島が読んだ際に、S島とT島が記述された部分を読み落とした、あるいはそれらの離島の風景の描写が執筆過程であまり記憶に残っていなかったと推察できる。
- 36) 中島「環礁」・『南島譚』収録の数篇の他に、素材・典拠をもとに創作された作品として『山月記』、『光と風と夢』、『悟浄出世』等が挙げられる。
- 37) 登場人物のロールチェンジとは作者の文学に存在するテーマである。〈南洋もの〉の中で「ナポレオン」の他に『南島譚』収録の「幸福」中の「一番哀れな男」と彼の「主人」との関わり方において似通ったロールチェンジが見て取れる。
- 38) 主人公の環境への不適応さは本作品以外に、「環礁」収録の他篇でも描かれている。例えば「マリヤン」(「パラオの役所の同僚とはまるで打解けた交際が出来ず」)や「夾竹桃の家の子」(「 Deng熱がまだ治り切らない」)などで、肉体的にも精神的にも南洋群島という環境に馴染めない主人公の形象が描かれていて、それは「ナポレオン」における「私」に当てはまる。
- 39) 中島はコロールに到着して以来いくつかの病に侵された。一九四一年七月二五日から八月一日にかけて赤痢や急性大腸カタルで寝こみ、八月二三日から発熱、九月始めまで Deng熱で倒れ一週間欠勤した(「書簡」『中島敦全集③』筑摩書房刊 二〇〇二・二、川口直江宛て一九四一年八月二五日、中島田人宛て同年八月十七日を参照)。さらに、土方は中島の南洋群島生活についてこう回想している。「トンは南洋ではほんとに淋しかったのだ。私以外のものとは、笑顔とつまらない冗談以外には殆ど何も話さなかったトン。(中略)実際、お役所の古い判任官たちの法規の無茶や、不思議な威張りやと僻みにうんざりしだしていたトンちゃんなのでしたから。」(中村光夫他編「パラオでのトンと私」『中島敦研究』筑摩書房 一九七八・一二、二七八頁)。
- 40) 注5前掲書、一〇月二日付、一二五頁。
- 41) 注33前掲書、一七九頁。
- 42) 「解題」『中島敦全集②』(筑摩書房刊 二〇〇一・一二)六四四頁。

(ぼうあ・えりお 本学大学院博士後期課程)